

## 2 手作業による抵抗——ジャテックのばあい

脱走兵をかくまう、逃がす

ベ平連（ベトナムに平和を——市民連合）の活動は、一九六五年にはじまった。そして、ベ平連のかたわらには、脱走米兵を助ける支援運動があった。反戦脱走米兵援助日本技術委員会（「ジャテック」JATEC: Japan Technical Committee to Aid Anti-War American Deserters）である。一九六七年に空母イントレピッドから脱走した四名をスウェーデンに送ったほか、いくつかのルートで兵士を逃がしている。この取り組みについては、最近になって具体的な体験が明らかにされはじめた。兵士をかくまい、次の協力者と連絡をとり、安全に移動させる。その技術は、探偵や刑事の尾行を切る技術であり、協力者どうしの連絡線を分断することで安全が保たれていた。脱走兵を追う捜査の手をかくぐるために用いられた技術は、どちらかといえば手工業的なものだった。携帯電話があり、監視カメラやGPS（全地球測位システム）の技術が普及した今日、ジャテックが活動した当時の技術で脱走兵を逃がす可能性は小さいかもしれない。だが、同時代の権力から脱走兵を守り、成功例は少ないながらも、目的を達成したことは注意に値する。

一九六八年、この逃走支援のネットワークに米国側のスパイ、ラッシュ・ジョンソンが入りこんだ。別の脱走兵とともに羽田から釧路へと空路で移動し、その後、船で国外に出る予定だった。しかし、途中の旅館でスパイが姿をくらます。結果的に、残った脱走兵は逮捕され米軍

に引き渡されている。

米兵の脱走支援活動をしていけば、いずれスパイが入ってくると予想できた。そのような事態を回避するための方法は、あったのか。警察のスパイについては、次のような対応をしたという。鶴見俊輔の回顧から引いておく。

まず、こいつはスパイだとか嫌疑をかけて、集団的に弾劾して吊るし上げるとか、そういうことはすまい。吉川〔勇二〕は共産党で、そういう査問をやったあげくにリンチになった事件を知っているし、私も藤田省三の査問とかがあったから、そういうのはやめようと思ったんだ。

そこで金と時間はかかるけれども、事務所では雑談をして、そのあとお店をひたすら梯子して、違うところに行つて飯を食うんだよ。そのうちにスパイだと言われている奴は、根負けして金もなくなって脱落しちゃうんだ〔笑〕。

それで朝の四時か五時くらいになると、もう古くからいる何人かだけしか残ってない。そこで重要な相談、スパイに聞かれては困るような相談を最後にするんだ。食い倒れ作戦だよな〔笑〕。疲れるけど、デモクラティックな方法なんだよ。

〔「戦争が遺したもの」三八一ページ〕

吉川は共産黨員として原水爆禁止運動にかかわったが、運動が政党に利用されることを批判した。一九六五年に除名処分を受け、その後、ベ平連の事務局を預かっている。査問のような



ことをしないというのは、共産党の失敗に対する反省が生かされた知恵だった。だが、米国側からのスパイに対する防禦には、限界があった。ひきつづき鶴見の回想である。

……脱走兵だと名乗って、おかしい人間が来るというのはほかにもあったんで、ベ平連のメンバーが面接して、ほんとうに脱走兵なのか確かめていた。そのスパイはジョンソンと名乗って京都のベ平連にやってきて、深作（光貞）と私が面接したんだよね。

いまから思えば、最初から怪しかったんだ。その男は、自分はなぜベトナム戦争に反対かというのを、筋道を立ててきちんと話すんだよ。それまでの脱走兵で、そんな準備してきたような筋道を立てて反戦思想を述べたてた奴なんていないんだ。

（三八二ページ）

## 賭け

面接をした鶴見たちは、脱走兵の演技をするスパイの、過剰な演技に疑いをもった。だが、それは、スパイであることの決定的な証拠ではない。目の前の人物は、ほんとうに脱走を願っている兵士かもしれない。

ジョンソンに会ったジャテックの関係者は、当初からジョンソンのようすがおかしいと感じ、警戒していたのだった。発信機らしきものをもっていたし、執拗な尾行もついていた。にもかかわらず、ジャテックは、このスパイをもふくめて逃走のルートに乗せた。栗原幸夫の回想が、関谷滋によって紹介されている。

……私は彼がスパイだろうとほとんど確信していました。そのことを鶴見俊輔さんに言ったとき、彼はじつにイヤーな顔をして、仲間のなかでそういう疑心暗鬼がおこるのは、運動がつぶれるときだと言いました。私はそのときの彼のイヤーな顔をこの三〇年間よく思い出しては、なぜだろうと考えつづけてきたといっても過言ではありません。というのも、運動のなかでのスパイという問題は私にとって、ソ連の肅清などとの関連で、ジョンソン以前からのひとつのテーマであったからです。

最近、私はどうやらひとつの結論に達したような気がしています。鶴見さんは正しかったという結論です。たしかに第一次ジャテックは、スパイ・ジョンソンによって破壊されました。しかしもしわれわれが、スパイの侵入にたいして身構え、すべての脱走兵や協力者にたいして疑惑の目を向けるようなことになったら、ベ平連の脱走兵援助の運動は崩壊しただろうと思いますし、いま、こうやって当時の運動参加者がフランクに思い出を語るなどという状態はありえなかつたと思います。

破壊されることをおそれる必要はない、それよりも秘密のない、オープンな運動を大事にしたいというのがいまの私の考えです。

【となりて脱走兵がいた時代】一〇三ページ

スパイの侵入を防ぐことができなかつたジャテックは、その後、活動のしかたを変えていかにざるをえなくなる。だが、ベ平連の運動そのものが解体されることもなかつた。これは、戦前の共産党が組織を構築しようとして崩壊に導かれたのとは対照的だ。ベ平連は、そもそも、解



体されるような組織をつくらなかった。

### 自発性と非暴力

高橋武智は、「私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……」のなかで石田雄の文章を引用している。ここでも、それを紹介しておきたい。これは、ジャテックの活動を回顧した本の出版記念会に石田が出席したときの感想である。「たとえば共産党のように既存の組織を使つたならば、一度に網をかけて押えることができたかもしれないが、個人と個人との信頼関係でつながれただけで、全体として形式的な組織があるというわけではなかったから、かえって秘密を守るのに有利であつた」。「この信頼を支えたのは完全に自発的な協力であり、また非暴力の連帯であるから、武器の輸送などで秘密がもれる危険性もなかった」。石田は、ジャテックが組織をつくらなかつた点と、自発的な協力が信頼をつくりあげた点を評価している（「一身にして二生、一人にして両身」一六七ページ）。

逃走支援でじっさいに兵士たちと行動をともにした山口文憲や吉岡忍らは、一九六八年の五月に一本の映画をみている。アラン・ドロンが主演した「サムライ」である。「尾行のまき方」の研修だった。素人が映画を真似てうまくいくのかどうか心許ないが、それでも具体的な知恵と技術が必要だった。

スパイだったジョンソンと行動をともにした吉岡の回想を引いておく。

ある段階から、リスクがあつても、彼がスパイという証拠はないんだから、やっぱり逃

がしてやろうじゃないか、という雰囲気傾いてきたような気がします。それは、いま振り返ってみれば、とても人間的な判断だったと思います。もしジョンソンがスパイだとしても、われわれが捕まったり、ジャテックの活動がダメになるだけでいいんだ、と。もし本物の脱走兵だったら、ここで突き放すのは、彼の人生をメチャクチャにしてしまうことになる、それは出来ないだろう、ということですから。

〔脱走の話〕五二―五三ページ〕

吉岡は、ジョンソンがスパイであると確信しはじめる。そして、それでもなお、ジョンソンを逃走ルートに乗せるという判断がよいのかどうか、迷った。理屈ではわかってても、スパイによって援助活動が破壊される可能性を考えれば、怒りさえ覚えたという。

でもね、あとで考えたら、あのときの秘密の活動、地下活動だから、人間関係が非常にせまくなるんです。最終的に判断するのは五、六人しかいない。そのなかで、そういう議論をはじめると、非常に険悪な雰囲気になって、一方が他方を追及する形になるんです。〔中略〕僕は現場を知っている、あの男の胡散臭さも見ている、実際に尾行もされている、という生の体験があるから、「おかしいじゃないか」と激しい口調になるんですよ。糾弾調になってくるのを自分でも感じるんです。あとになって、連合赤軍事件とか、オウム真理教の事件とかがあるたびに、そのときの気持ちを僕は思い出すんです。

〔五三―五四ページ〕

尾行のしかたと、尾行を切る方法とは、同じ知恵の両面である。不信から生み出され開発された技術を、どのようにすれば信頼をつくりあげる道具へと変えられるか。それを、ジャテックの活動に読みとることができる。選択肢は、相手と同じ技術を磨いて拮抗することだけではない。組織を堅固にして、その内部に対して技術を用いることでもない。相手の真意を確かめるための技術をあえて「用いない」という選択をしたとき、長くつづく信頼が生まれたことを銘記しておこう。ジャテックの活動の実態については、関係者に配慮して、いまはまだ「封印」されている事実も残っているだろう。だが、将来、詳細な記録が残されることを期待したい。